



號三十七第

月十年八十和昭
行發日五十
行發日五十・同一月每

錢五部一價定
錢十六(共稅)分年一

一才 田杉 編發行發
人副人印輯
國公谷北日區町麩都京東
社信通盟同 所行發

總員戰鬥配置

敵國戰意を破碎擊滅せよ

社長 古野伊之助

歐洲、東亞の天地に漲る戰雲の去來は、愈上決戰の機迫つてゐることを我等は日々の職場を通じて一億國民に先立つてよく知らせ、よく解するところである。

東部戦線は、ギリギリと退いてゐる。イタリヤ半島においても敵米の機先を制して萬全の守備態勢に入つたやうである。この足取りをちつと眺めてみると、どうやらドイツは歐洲の大陸に鐵壁の防備を布いて米英の反擊作戦を防衛しつつ歐洲の新秩序確立に邁進する

のである。我々同盟同志の中からも應召の兵士として前線に戦つてゐるものもあれば、又報道戦の戦士でもある。時々前線から或は應召の一員として、又報道陣の戦士として戻つた諸君から聞いて居られることと思ふ。「血と鐵との戦を繰返してゐるんだ」といふこの悲

るのではなからうかと思はれる。

戰場に既に戰鬥配置



痛な聲を、我々本土に留まる國民は、何んと聽いてゐるのであらうか。北方の孤島に骨を埋め、南方の雲に血しぶきを發ねてゐる我々同胞骨肉の犠牲を無駄にしてはならない、當然の熱情が沸き起ることと思ふ。

さきに東條總理が全國民に向つて「總員戰鬥配置につけ」と叫んだのも當然のことであると思ふ。一億の國民は一億一家である。この聲に應じて全國民津々浦々に愈上決戰だといふ心構へが彌が上にも昂つて来たことを考へ、我々はこの職域を通じてこの聲を全國民に傳へた同志に對して、今更「戰鬥配置につけ」といふ必要はないと思ふ。この首相の一言を一億國民に傳へたその職場に立つて、その職責を果した我々は、その瞬間戰鬥の配置についてゐることと思ふ。只これからは我々同志五千が一致結束して、敵陣に向つて突撃する只この一途あるのみである。一億國民はもう心も物も人も、總てこの戰爭完遂の一つの目的に集結してゐるのである。

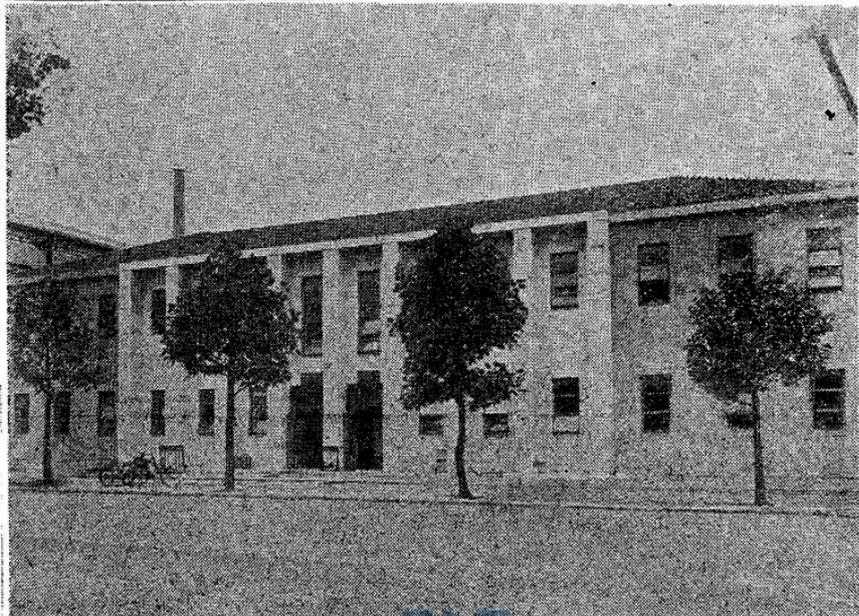
完勝の目的に邁進

これを區分していへば、かねがねいつてゐる通り兵員の充足と兵器の充實と食糧の確保と、この三つ以外に國民に残されてゐる仕事はもうないはずだ。一切の事業も一切の學業も一切の商賣も全部止めて、心と人と物とすべてを擧げて、戰爭完勝の目的に一路邁進するこの一つあるのみである。

我々同盟の同志は愈上我々の目的に向つて、五千の團結を固うしてその目的に向つて突進する一途あるのみである。その目的とは何ぞや。敵國戰意の破碎擊滅である。我々がこの千古未曾有の時代に皇國日本に生を享けて、國の對外思想戰の第一線にその使命を果た

同盟別館

總務局各部、編輯局調查部、經濟局業務部、聯絡局航空部、外國通信社支局事務所等あり



し得ることは、我々同志五千にとつての無上の光榮であり、歡喜でなくてはならぬと思ふ。而してその目的は敵國戰意の破碎擊滅にある。その方法は積極果敢な報道の彈丸である。その面魂は同盟五千鐵石の團結である。

斷乎たる決意

國も同盟も大決戰の眞つ最中にうろろろ内輪喧嘩をする者は反逆者である。泣言をいつたり苦情をいふ者は利敵行為を事とする輩である。國民の一人々々の中にあつても亦、社内五千の同志にあつても奉公は一つである。一切の内輪喧嘩は國民の間においても、社内

においても斷じて許すことは相成らぬ。弱いは扶け、誤つた者は正し、遅れたものは引きずつて勝利の一途に向つて、我々は一路邁進しなければならぬ。緊迫せる現下の情勢に鑑みて一入我々の決意を新にし、我々の職場を戰場としての最後の戰を立派に戦ひ抜かねばならぬ。

どうかこの機會において諸君も變轉する世界の情勢を極めて冷靜に、而も斷乎たる決意を以て、我々の戰爭目的完遂のため敵國戰意破碎擊滅のために勇往邁進する決意を固めて戴きたいと思ふ。(昭和十八年十月八日日本社大詔奉戴式訓示)

辭令

經濟局主查 堀 義貴

海外局長兼務を命ず
常務理事 堀 義貴

總務局主查兼經濟局主查とす
總務局主查 島山 敏行

海外局長兼務を命ず
編輯局長兼務 松本 重治

海外局長兼務を命ず
編輯局長兼務 長谷川才次

編輯局長兼務を命ず
編輯局長兼務 稻本 國雄

經濟局副部長兼務を命ず
編輯局長兼務 村田爲五郎

經濟局副部長兼務を命ず
編輯局長兼務 五十嵐友幸

經濟局副部長兼務を命ず
編輯局長兼務 三浦 良知

經濟局副部長兼務を命ず
編輯局長兼務 後藤 丙午

編輯局長兼務を命ず
編輯局長兼務 鈴木 一

編輯局長兼務を命ず
編輯局長兼務 高松保太郎

編輯局長兼務を命ず
編輯局長兼務 小倉 彰

編輯局長兼務を命ず
編輯局長兼務 多治 治雄

編輯局長兼務を命ず
編輯局長兼務 尾林 福松

編輯局長兼務を命ず
編輯局長兼務 三輪 武久

海外局歐米部次長を命ず(九月十一日附)
支社長兼務 猪伏 清

マカッサル支社總務部長兼編輯部
長兼務を命ず
マカッサル支社 京谷 定茂

マカッサル支社總務部長兼編輯部
長兼務を命ず
マカッサル支社 若杉 修介

南京支局勤務を命ず(八月二十五日附)
大阪支社勤務社員 和嶺 稔

小倉支局勤務を命ず(九月十三日附各通)
南方總局同 堂上 繁夫

依願解職(七月十六日附)
大塚 貞夫

滿支南方特急視察

△……同盟特異の報道任務……△
△……總支社局十三風景……△

本社政經部 大屋久壽雄

我等の職域

ニューズの標準

ビルマ獨立に際し應援のため特派されたのを機會に大急ぎで南方を小廻りに一巡した。各地支社局の元氣な友達衆と各種の問題に就いて大いに語つて甚しく愉快であつた。

南方でけ昭南が中心となつて南方放送をやつてゐる。社長の所謂隣組放送の第一陣である。いづれは滿華を範圍とする大陸放送も開始されるのだらうと思ふが、この隣組放送を現實にやつて見ると、ニューズの標準、即ち何がニューズであるか、といふことについてのわれわれの既成觀念に相當大膽な反省再批判の利刃を當てなければならぬことに氣附く。

從來われわれの取材標準はともすれば東京中心になりがちであつた。打電の價値ありやなしの判断標準が東京に置かれた。東京が不要と思ひさうなものは「つまらない」で片附けられる傾向が多分にあつた。しかし隣組放送は東京のニューズ價値判断とは全く別個な標準で取材活動することをわれわれに要求する。東京ではつまらないものでも南方相互間、大陸相互間では大いにつままるものが澤山あるのだ。

このことに氣附かないで従來ど

ことは到底出來ないと思ふ。越境精神に就ても一つある。それは本社たるもつとも大きな悩みの一つとなつてゐる手不足の問題に關係してゐる。

しかし、ほんとに手不足なのであらうかと靜かに反省して見ると事實手不足なのは相違ないが、それにもまして不足なのは工夫であり、私の所謂「越境精神」であるかに感じられた。

刻下の勞力狀況に鑑みると、絶對數と人的質の上からの手不足を啣つて見ても、それは所詮はじまらないことなのだ。それは單に同盟だけの悩みではない。日本全國、大東亞全地域、否全世界の悩みなのである。としてみればわれわれは與へられた條件をもつて如何にして最大能力を發揮するかといふことに對してまづ心を向けなければならぬのだと思ふ。

人の持場のことでも氣附いたこととはどしどし手傳つてやる。といふ心構へで互に相扶け相補つて行くことが緊急の要請でなければならぬ。私はこれを越境精神と呼ぶのだが、各地で随分とかゝる態度で獻身的に活動してゐる友達にも會つたけれど、まだまだ全體と

して舊態依然たる「相互不可侵」的態度で毎日の活動が續けられてゐる。これもまた残念なことの一つである。

書かざる記者
更にも一つ。私は書くだけが記者の仕事だとは考へない。書く書こうと焦れば相手は用心する。胸襟を開かなくなる。だが讀つて考へてみれば、われわれくらゐの下に容易に接近し得、且つ何らの偏見なしに意見を述べ、これに協力し易い立場に置かれてゐるものは他に多くないのだ。そして謙一度總れば直ちに本職の報道手段を全開して大々的にこれを全世界に傳へ得る、といふさうした立場にわれわれはゐる。

このことを深く認識してゐるならば、われわれの記者としての日常活動態度もまた現在とは自ら變つて來て然るべきだと信ずる。

このことも案外忘れられてゐるのではあるまいか。記事を取らう取らうとすれば勢ひ相手はこちらを警戒する。それでは力の分散であり彼等の對立である。同盟としてはこれは極力避けなければならぬことである。

以上前置きが長くなつたが以下各總支社局を特急で巡ることしよう。

北京にて
懐しの北京！ 東堂子胡堂の總局は私がゐたころから見れば中を建て増して大いに廣くなつてゐたが、それでも人口稠密なることは御多分にもれない。佐々木總局長の病氣も案じた程でなく毎日醫者に行つた途次一、二時間は社に「顔を出さずにはゐられない」らしい。あれ程嗜んだ酒をぶつりと止めて大いに肥つてゐた。假病ぢやないかといふ不逞な奴もある。と恰も私の心中を見抜いたかの如く佐々木大人は憤慨して眞性の病氣であることを強調するので、私も大いに同情を表して來た次第である。

上海にて
總局は最近舊共同租界の川縁に引越したが私が行つた時までは北四川路であつた。

天津にて
支局は舊佛租界の元天津廣報社屋に引越してゐた。従つて社屋は廣大、他の支社局に比べると些がガランとした感じである。自動車は一臺しかなく、木炭車なので、レといつてから動き出すまでに十五分くらゐかかる。天津東報新報社長大川孝之助先生（前は本社の庶務部長です）のどえらく立派なガソリン車を見て久保田支局長ならずともアアと長大息せざるを得なかつた。

南京にて
こゝは前と同じく、中央電訊社と仲睦しき同居暮らし。中村支局長も依然インコを溺愛し重慶の不明を痛歎すること六年前と變りなであるがこゝも自動車は「博物館用」の古物が一臺一日動いては三日入院といふ有様。洋車に乗れば三丁走つて五圓也（但し備備券であるがそれにしては痛い）。街はだゞつ廣いし、「足、足、足が惱みの種だよ」と平柳編輯主任の痛歎をそのまゝ取次ぐ。

北京にて
懐しの北京！ 東堂子胡堂の總局は私がゐたころから見れば中を建て増して大いに廣くなつてゐたが、それでも人口稠密なることは御多分にもれない。佐々木總局長の病氣も案じた程でなく毎日醫者に行つた途次一、二時間は社に「顔を出さずにはゐられない」らしい。あれ程嗜んだ酒をぶつりと止めて大いに肥つてゐた。假病ぢやないかといふ不逞な奴もある。と恰も私の心中を見抜いたかの如く佐々木大人は憤慨して眞性の病氣であることを強調するので、私も大いに同情を表して來た次第である。

上海にて
總局は最近舊共同租界の川縁に引越したが私が行つた時までは北四川路であつた。

天津にて
支局は舊佛租界の元天津廣報社屋に引越してゐた。従つて社屋は廣大、他の支社局に比べると些がガランとした感じである。自動車は一臺しかなく、木炭車なので、レといつてから動き出すまでに十五分くらゐかかる。天津東報新報社長大川孝之助先生（前は本社の庶務部長です）のどえらく立派なガソリン車を見て久保田支局長ならずともアアと長大息せざるを得なかつた。

現地の消息

新京にて

私は今度の旅行を滿洲國から始めた。

新京の國通本社は驛前の中央通に堂々たる「國通自身の建物」を持つてゐる。羨しいといへば羨しいやうなものだが、中に入つてみると什器、調度の類は同盟同様であるひはそれ以下だ。皆條條のとび出たひどい椅子に頭張つて、人口の稠密度を誇つてゐる。

私が着いた頃折柄防護演習があつて國通本社は敵間諜の蹂躪に委せられ機密書類を全部持ち去られた上爆弾を仕かけられたとかで松方理事長が全員を集めて大訓示をしてゐた。お蔭で私は出入の度に守衛さんに誰何されて弱つた。

こゝも自動車も甚しく不自由でその上街がだゞつ廣いので時間定めに各官廳公衙を巡回する「定期」を出してゐる。記者の往復も原稿の集配もすべてこの定期による原則としてゐて特別な自動車使用はいつも嚴重に取締られてゐた。

北京にて
懐しの北京！ 東堂子胡堂の總局は私がゐたころから見れば中を建て増して大いに廣くなつてゐたが、それでも人口稠密なることは御多分にもれない。佐々木總局長の病氣も案じた程でなく毎日醫者に行つた途次一、二時間は社に「顔を出さずにはゐられない」らしい。あれ程嗜んだ酒をぶつりと止めて大いに肥つてゐた。假病ぢやないかといふ不逞な奴もある。と恰も私の心中を見抜いたかの如く佐々木大人は憤慨して眞性の病氣であることを強調するので、私も大いに同情を表して來た次第である。

上海にて
總局は最近舊共同租界の川縁に引越したが私が行つた時までは北四川路であつた。

天津にて
支局は舊佛租界の元天津廣報社屋に引越してゐた。従つて社屋は廣大、他の支社局に比べると些がガランとした感じである。自動車は一臺しかなく、木炭車なので、レといつてから動き出すまでに十五分くらゐかかる。天津東報新報社長大川孝之助先生（前は本社の庶務部長です）のどえらく立派なガソリン車を見て久保田支局長ならずともアアと長大息せざるを得なかつた。

南京にて
こゝは前と同じく、中央電訊社と仲睦しき同居暮らし。中村支局長も依然インコを溺愛し重慶の不明を痛歎すること六年前と變りなであるがこゝも自動車は「博物館用」の古物が一臺一日動いては三日入院といふ有様。洋車に乗れば三丁走つて五圓也（但し備備券であるがそれにしては痛い）。街はだゞつ廣いし、「足、足、足が惱みの種だよ」と平柳編輯主任の痛歎をそのまゝ取次ぐ。

こゝも自動車不足で困つてゐたが、通稱「殿様」こと鈴木總務部長のホガラカな統帥のもとに實に和氣藹々として、懐しの北京であつた。（寫眞は北支總局）

天津にて
支局は舊佛租界の元天津廣報社屋に引越してゐた。従つて社屋は廣大、他の支社局に比べると些がガランとした感じである。自動車は一臺しかなく、木炭車なので、レといつてから動き出すまでに十五分くらゐかかる。天津東報新報社長大川孝之助先生（前は本社の庶務部長です）のどえらく立派なガソリン車を見て久保田支局長ならずともアアと長大息せざるを得なかつた。

南京にて
こゝは前と同じく、中央電訊社と仲睦しき同居暮らし。中村支局長も依然インコを溺愛し重慶の不明を痛歎すること六年前と變りなであるがこゝも自動車は「博物館用」の古物が一臺一日動いては三日入院といふ有様。洋車に乗れば三丁走つて五圓也（但し備備券であるがそれにしては痛い）。街はだゞつ廣いし、「足、足、足が惱みの種だよ」と平柳編輯主任の痛歎をそのまゝ取次ぐ。

上海にて
總局は最近舊共同租界の川縁に引越したが私が行つた時までは北四川路であつた。

北京にて
懐しの北京！ 東堂子胡堂の總局は私がゐたころから見れば中を建て増して大いに廣くなつてゐたが、それでも人口稠密なることは御多分にもれない。佐々木總局長の病氣も案じた程でなく毎日醫者に行つた途次一、二時間は社に「顔を出さずにはゐられない」らしい。あれ程嗜んだ酒をぶつりと止めて大いに肥つてゐた。假病ぢやないかといふ不逞な奴もある。と恰も私の心中を見抜いたかの如く佐々木大人は憤慨して眞性の病氣であることを強調するので、私も大いに同情を表して來た次第である。

上海にて
總局は最近舊共同租界の川縁に引越したが私が行つた時までは北四川路であつた。

天津にて
支局は舊佛租界の元天津廣報社屋に引越してゐた。従つて社屋は廣大、他の支社局に比べると些がガランとした感じである。自動車は一臺しかなく、木炭車なので、レといつてから動き出すまでに十五分くらゐかかる。天津東報新報社長大川孝之助先生（前は本社の庶務部長です）のどえらく立派なガソリン車を見て久保田支局長ならずともアアと長大息せざるを得なかつた。

南京にて
こゝは前と同じく、中央電訊社と仲睦しき同居暮らし。中村支局長も依然インコを溺愛し重慶の不明を痛歎すること六年前と變りなであるがこゝも自動車は「博物館用」の古物が一臺一日動いては三日入院といふ有様。洋車に乗れば三丁走つて五圓也（但し備備券であるがそれにしては痛い）。街はだゞつ廣いし、「足、足、足が惱みの種だよ」と平柳編輯主任の痛歎をそのまゝ取次ぐ。



廣東にて

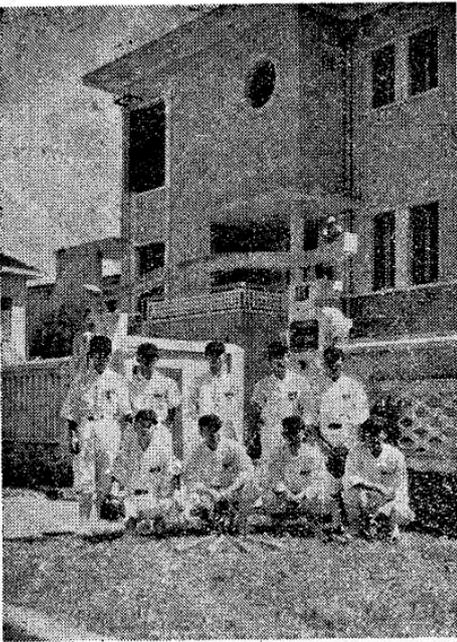
空爆は決つて午後の三時すぎ。敵さんは晝めしを食つてからやつて来るです」と寫眞部の暗室に皆屯して冗口を叩いてゐる。もう些か慣れつた。元氣なのが屋上

西貢にて

佛印銀行の三階に移轉してから建物は堂々たり、廣さも廣しといつてゐる間もなく、こゝも亦いつぱいになつてはみ出しそうになつた。それにエレヴェーターが朝と夕刻ちよつとしか動かないので上り下りが大變である(三階と言つても普通の五階分はある)。こゝでは支社内に放送室を設けてラジオのニュース放送をしてゐる。南方各地へのタバコその他重要兵站基地としての西貢支社の役割りは大きい。

バンコックにて

こゝも重要兵站基地だ。小澤無



(河内支局と同支局野球場二次頁記事参照)

電君は飛行場が、り、物資買出しが、り、自動車差配、それに本職の無電と一人四役で「バンコックの顔役」になつてゐるが、それでもまだ仕事に足りないやうな顔をしてみせる。記者諸君は當番制でガリパンを見てゐる。自動車の比較的の自由なと、飯のうまいのと、皆揃つて基が下手なのがこゝの特長である。

ラングーンにて

乾期ともなれば毎日二、三回の空襲だといふが雨期中はそれ程でもない。朝が早く夜遅いこの支社の人々は實によく働く。住宅、食事、あらゆるものが最劣悪な条件のもとにありながら勤務時間はこゝが一番長かつたやうだ。自動車も極めて不自由だし、電話は一本しか取れないし、爆撃があれば支社のあるところは最危険區域だし。それ

でも皆は朗かだ。夜になつても活動小屋一つないラングーン、地方人に許された料理屋一つないラングーン、年中眞暗の燈火管制下のラングーン。従つて基は皆相當に強い。ラングーン支社の活動については他に報告すべき餘り多くのものを持つてゐるのでこゝでは書き切れない。

昭南にて

正金の建物の二階、三階に事務所がある。人口の稠密はまだそれ程でもないが、すくいつぱいになつてはみ出すだらう。社宅も一應人の住める形を呈してゐる。自動車もまづまづだが、乗り潰したらあとの補充は利くまい。こゝも夜の生活のないこと他と同然。従つて各自社宅に屯して毎夜喋つたり議論したりしてゐるやうだ。

社宅はいくつかの集團に分れてゐるが、そのうちで聖人部落といふのがある。それはマウント・エリザベスにある三軒一組の住宅群でこゝには福岡總局長、秋山經濟部長、松宮總務部長の三人がそれぞれ一軒宛(尤も一人で一軒占領してゐるのは總局長だけだ)占めてゐる。この三人のうち福岡、秋山の兩氏はほんとの聖人である。松宮氏は本来は生臭だが已むを得ず隣組の誼みで猫を冠つてゐるやうだ。マライ人の運轉手も「フクオカサンお寺さん、アキヤマサンお寺さん」とたどたどしい日本語で言ふのである(こんなことを教えた奴け誰だ!)

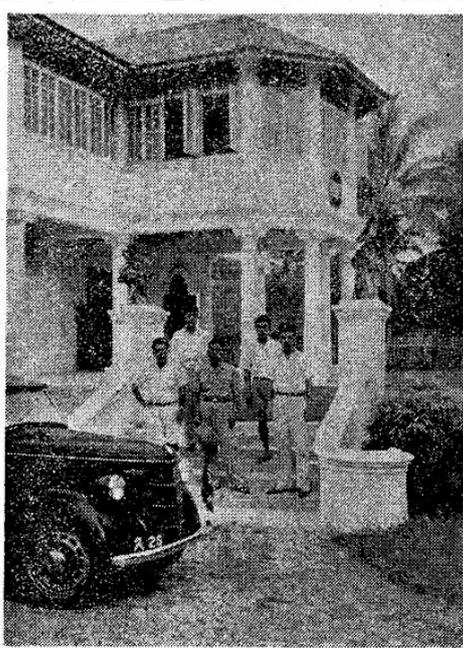
ジャカルタにて

こゝも重要な兵站基地だ。白壁の三階建社屋は目下のところ適度の大きさ。お隣が日映でそのまた

隣りに同盟日映共同食堂がある。飯はバンコックと同じくらゐうまい。南方の双壁であらう。社宅も自動車も目下のところ不滿の筋はまづないといへる。夜も十一時まではまづまづ何とかなる。空襲もまだない。或る兵隊の言を藉りれば「ジャカルタ天國、ラングーン地獄」である。安逸は心の敵!

バンドンにて

風光明媚とはこゝのことか。靜かな街に小ぢんまりとした支局。昔はフォードか何かの支店であつたらしい建物。その二階が事務所で下がこの街でつい先頃から同盟が經營を始めたガリバン原紙の乾燥場になつてゐる。



時々燈管がある。クチンにて 林の中に家があつて道がついてゐる。南方の都市にはそんな感じのところが多いがクチンは殊にさうだ。夜になれば虎ぐらゐ出て來るかも知れない、といつても人は信じてゐるであらう。そこで小椋支局長以下暗い電氣の下で(電力が弱いのださうだ)頑張つてゐる。支局長が寫眞部のベテランなので時々「繪入通信を發行してこれを『寫眞入り』と稱し『大好評』なんださうだ。チャップリンが乗つて出た來さうな小型のボロ自動車が一臺ある。(左圖はクチン支局) マニラにて 「夕方になると自動車はエンコシます」

野津記者が記者兼工場長で仲々忙しい。印刷工場、パラフィン溶解場、原紙製作所と三つから成つてゐる——と言へば大きい、この三つが難然と一つとところで混み合つてゐて白服では入れない。しかし月産四萬五千枚……とこれは目下の目標である。住宅は郊外のちよつとしたバンガローが五つ六つ。「家と眺めばかりよくて、夜になると何とも淋しくてね」と上野支局長が情

けなさそうに言つてゐた。こゝも一日十リットルが一臺分の配給だから四臺で四十リットル。いかに節約してもマニラの街は廣いです。夕刻になると動きません。河に面した廣大な建物が文化會館にあつて、この中に同盟も日映も映配もその他文化關係機關の一切が入つてゐるが、こゝから社宅まで大變遠い。歩いては通へない。自動車はガソリンがない。名物のカルマタ(小馬の曳く輕馬車)でゐますよ。(九・二五)

も三輪自動車もめつきり少くなつて容易に捉らない。出勤と退勤の足の問題が一苦勞だ。假に捉へても社宅から事務所まで大體一圓當、往復一日二圓ちややり切れない。社で二、三臺カルマタを買つたらどうだと提言してみたら買入れのカルマタがもうないとのこと。夜は十一時までなら何とかなるが、足代に食はれて夜の分まで資金廻らずと歎く。こゝだけが運搬の都合上事務所で晝飯を食ふ組織となつてゐない。皆何がしかの飯代を社から貰つて思ひ思ひに外で食事をしてゐるが、それが又月にすれば相當の赤字ださうな。 人事交流と意志疎通 ところで私の思へらく 以上のやうに大陸、南方の友達衆は皆、それぞれの土地の條件に従つて、多少の凸凹はあるが、それぞれ悪条件と闘ひつゝ、實務に忠實ならんことに努力してゐる。南方當習の晝寝も西貢を除けば他はどこでもそんな悠長なことはやつてゐない。 外に出てみると内地にゐた時とは異つて意外な方面に同盟がしなければならない仕事がつてゐるのにも氣附く。そこに工夫も要れば努力も要る。南方ほけどころの話ではない。 これは是非とも、一面外と内との人事交流をもつと組織的に増進すると共に、他面本社と外地總支社局との間に現在よりも一層積極的且つ能率的な意思疎通の方法を講じ、これを益々緊密化するところが緊要なことであると私は思つた。皆で考へやうではないですか。それから最後に一言。 大陸でも南方でも友達は、本に餓えてゐる。同志諸君よ、大いに本を送りませう。彼らはほろほろになるまで、順廻しにして讀んでゐますよ。(九・二五)

